

A-5

キルギス語のエコーワード

小田桐 奈美(関西大学)

アクマタリエワ ジャクシルク(日本学術振興会特別研究員/新潟大学)

【要旨】キルギス語の複合語の一種である *paired words* には、重複(繰り返し)によって形成されるものはいくつかある。本発表は、その中でもエコーワード(EW)、すなわち以下のように、もとの語の語頭音節に対する音韻的操作によって作られるタイプを扱い、その特徴を明らかにするものである。先行研究は概説的な記述にとどまり、キルギス語の EW の全体像は未だ明らかにされていない。そこで本発表は、母語話者への聞き取り調査や、自然会話における用例を記録したフィールドノートに基づいた考察の結果、キルギス語の EW に関する新たな知見として、以下の3点を示すことを目的とする。

- ①音韻的特徴:後続要素の最初の音の選択(m-, p-, s-)において、法則性は見出せず、個人差が大きい。
- ②語形成上の特徴:様々な品詞や外国語でも形成可能で、生産性が高い。
- ③意味的特徴:総称的な意味以外が示されるのは、文脈が明らかな場合のみ。

1. はじめに

本発表は、主に口語のキルギス語で観察されるエコーワード(以下 EW)の特徴を明らかにするものである。

キルギス(クルグズ)語は、テュルク諸語の北西(キプチャク)語群に属し、中央アジアのキルギス共和国の他に、ウズベキスタン、タジキスタン、カザフスタン、中国の新疆ウイグル自治区や、アフガニスタン、トルコなどで話され、480万を超える話者を持つ。音声および語彙面での差異から、北と南の2つ、または北、南西、南東の3つの方言グループに分かれるが、標準語は北部方言に基づく(Biyaliev 2003: 4, Oruzbaeva 1997: 286-7)。庄垣内(1988: 1417-8)によると、キルギス語の母音調和はテュルク諸語の中で最も発達した段階のものであり、この言語の大きな特徴となっている。母音調和と子音交替(同化・異化)により、接尾辞は多数の異形態を持つ。キルギス語の母音と子音の体系は以下のとおりである。母音:a, e, i, i, o, ö, u, ü, aa, ee, oo, öö, uu, üü、子音(括弧は借用語に用いられるもの):p, b, t, d, k, g, q, (c), č, (šč), j, (f), (v), s, z, š, (ž), y, (χ), κ, m, n, ŋ, l, r

キルギス語の EW は、複合語の一種である *paired words*(以下 PW) に分類される。Oruzbaeva(1987: 100-102)によると、PW の特徴は、第一に総称的・集合的な意味を持つこと、そして、しばしば表現力豊かで様々なニュアンスを持つことである。また、PW は以下の3つのタイプに分かれる。

- ①重複:1つの語を、同様または異なる形式で繰り返すことより、意味が強調される。

(1) kün(日)→kün-dön-kün-gö

日-ABL 日-ACC

「日ごとに」

- ②総称的 PW:両方の構成要素が独立した意味を持ち、単独でも用いられ得る語であるもの(例(2)の a.)、片方は現代キルギス語では意味を失い(ただし他の現代テュルク諸語では意味を持つ場合もある)、当該 PW の構成要素としてのみ使用されるもの(例(2)の b.)、両方とも単独では用いられず、特定の PW でのみ

使われるもの(例(2)の c.)がある。

(2) a. ata(父) + ene(母) → ata-ene「両親」

b. uruš(ケンカ) + keriš(?, アルタイ語では uruš と同義) → uruš-keriš「あらゆるケンカ」

c. ĩpĭr(?) + sĭpĭr(?) → ĩpĭr-sĭpĭr「くず、がらくた」

③押韻された PW、あるいは重複: 先行要素は独立した意味を持つ語で、後続要素は先行要素の韻を踏んだ繰り返しである。もとの語が子音で始まる場合、後続要素では語頭子音が置換される。もとの語が母音で始まる場合、後続要素では子音が付加される。後続要素は常に先行要素と同じ数の音節、同一の母音および最終子音、そして個別のアクセントを持つ。

(3) a. nan(パン) → nan-pan「パンとか」

b. kant(砂糖) → kant-mant「砂糖とか」

c. otun(薪) → otun-sotun「薪とか」

注:EW の語頭子音およびグロスはイタリックと太字で示す。

以上のように、PW には重複(繰り返し)によって形成されるものがいくつかあるが、3 つ目のタイプが本発表で検討する EW である。なお、EW を含めた PW は、他の複合語と異なり、キルギス語ではハイフンが用いられるのが特徴である (Abduvaliev 2008: 26–27)。また、亀井ほか (1996: 1084–5)では、EW は南アジアの諸言語を中心に広く見られる語形成法として紹介されているが、広くテュルク諸語にも特徴的に見られるものである (Johanson 1998: 50, 2002: 31, Oruzbaeva 1987: 102)。

2. 先行研究の検討と問題提起

EW はキルギス語文法の中でも周辺的な位置付けにあり、例えば日本語による文法書の飯沼 (1994)では、EW に関する記述が見られない。現地の研究者による先行研究も概説的な記述にとどまり、キルギス語の EW の全体像は未だ明らかにされていない。Oruzbaeva (1987)および Abduvaliev (2008)で明らかになっている点と課題は以下のとおりである。

明らかになっている点	課題
後続要素の最初の音は、m-, p-, s-のいずれか(例(3))。	m-, p-, s-のうち、どのように選択されるのか不明。
最もよく見られるのは名詞(例(3))だが、他の品詞(例えば副詞や副動詞)でも形成可能。	生産性の高低が不明。また、名詞以外の用例がほとんど示されていない。
総称的な意味を表し(例(3))、時に軽蔑や皮肉、愛称形・指小形のようなニュアンスが含まれることもある。	総称的な意味以外が含まれる条件が不明。

以上を踏まえ、本発表は、キルギス語の EW に関する新たな知見として、以下の3点を示すことを目的とする。

- ①音韻的特徴: 後続要素の最初の音の選択 (m-, p-, s-) において、法則性は見出せず、個人差が大きい。
- ②語形成上の特徴: 様々な品詞や外国語でも形成可能で、生産性が高い。
- ③意味的特徴: 総称的な意味以外が示されるのは、文脈が明らかな場合のみ。

3. 調査方法

本発表で用いるデータのうち、出典を明示していないものは、以下の方法で発表者が収集したものである。

①言語コンサルタントへの聞き取り調査

- ・第一発表者によるキルギス共和国およびオンラインでの聞き取り調査(2016年2月、2022年9月)。主にキルギス語-ロシア語辞書 (Yudaxin 1965) から語彙を抽出して調査票を作成し、コンサルタントには各語をもとに EW を作るよう依頼した。調査票に含まれる語彙は、キルギス語の名詞(一部アラビア語やペルシヤ語を起源とする語彙も含む)、名詞以外の品詞、ロシア語起源の借用語、日本語の地名などである。本調査は、第二発表者を含む3名の母語話者を対象に行ったものである。

- ・第二発表者によるキルギス共和国での聞き取り調査(2022年8月)。

- ・両発表者による、5名の言語コンサルタントを対象にオンラインで実施した、ディスカッション形式での聞き取り調査(2023年1月)。

②自然会話のフィールドノート

- ・第一発表者がキルギス共和国滞在中に遭遇した例を書き留めたもの(2016~2018年のうち、各年1ヶ月程度の滞在)。

4. 考察

本節では、第2節で整理した先行研究の3つの課題に沿って、キルギス語の EW の特徴を明らかにしていく。

4.1 音韻的特徴

EW は主に口語のキルギス語で観察されるものだが、例(3) a. の nan-*pan* (パンの EW) や、以下の例(4)のように、広く定着し、正書法辞書 (Karasaev 2009) に記載されている例もある。

(4) čay-*pay* (お茶の EW)

EW の形成にあたって、後続要素の最初の音は、どのように選択されるのだろうか。まず、後続要素の最初の音は、先行研究で明らかになっているとおり、m-, p-, s-のみであることが、発表者による調査でも再確認された。また、m-, p-, s-から始まる語をもとに EW を作る際は、後続要素において同一の音が避けられることも明らかになった。

(5) salat (サラダ) の EW *salat-salat

なお、例(5)のような完全な繰り返しは、EW としては許容されないが、Abduvaliev (2008: 26) では完全な

繰り返しも PW の一種として挙げられており、強調の意味があるとされている。

(6) a. *čoŋ-čoŋ* (「大きい」の繰り返しによる強調)

b. *mašine-mašine* (「車」の繰り返しによる強調)

発表者は当初、後続要素の最初の音の選択において、先行要素の語頭音が影響するという作業仮説を立てていた。そのため、調査票におけるキルギス語の名詞の抽出にあたっては、全ての音素から始まる語彙が含まれるように工夫した。だが以下のとおり、1つの語彙について *m-*, *p-*, *s-*の全てが可能な場合も見つかった。

(7) *idiš* (食器) の EW: 3名 (言語コンサルタント A~B) を対象とした聞き取り調査の結果

A: *idiš-ayak* (「食器類」を意味する「総称的 PW」(第1節参照)。 *idiš-midiš* とは言わないとのこと。)

B: *idiš-midiš*

C: *idiš-pidiš*, *idiš-sidiš*

このように、後続要素の最初の音の選択において法則性は見出せず、個人差が大きいことが明らかになった。一方で、ディスカッション形式による聞き取り調査の結果、EW では完全な重複が避けられること以外にも、一定の制約がある可能性が示唆された。以下は、全てのコンサルタントが許容不可とした例で、後続要素が *m-* から始まるものである。

(8) a. *nan* (パン) の EW **nan-man*

b. *alma* (りんご) の EW **alma-malma*

あるコンサルタントによると、最もよく使うのは正書法辞書にも記載がある *nan-pan* で、*nan-san* は可能かもしれないが、*nan-man* は言えないという。一方で、同じく正書法辞書に記載がある *čaj-pay* (お茶の EW、例(4)参照) については、*čaj-say* や *čaj-may* もあり得るといふ。他のテュルク諸語における EW では、後続要素の最初の音が *m-* のみの場合もあり、*m-reduplication* と呼ばれることもある(例えばトルコ語を対象とする Armoskaite & Kutlu (2015) など)。キルギス語の EW ではなぜ *m-* が避けられる場合があるのか、今後明らかにする必要がある。

4.2 語形成上の特徴

キルギス語の EW の生産性はどの程度のものなのだろうか。先行研究で指摘されているとおり、最もよく見られるのは名詞である。調査票を用いた聞き取り調査では、キルギス語の名詞をもとにした場合、ほぼ全てで EW が作成可能であった。なお、EW が主に口語のキルギス語で観察されることを踏まえ、語彙の抽出にあたっては、日常生活でよく用いられる語を優先した。だが、全ての音素から始まる語を網羅するために、抽象的な語や一般的には用いられないような語も含まれており、そういった語では EW が作成できなかった(例: *gozo* 「綿花の一種」)。

以下の例(9)、(10)のとおり、名詞であれば、キルギス社会で広く使用されているロシア語をはじめとし、外

国語でも作成可能であることが分かった。

(9) ロシア語を用いた例

a. gostinica-**m**ostinica (ホテルとか) b. noski-**p**oski (靴下とか) c. pečēn'e-**s**ečēn'e (焼き菓子とか)

(10) 日本語の地名「大阪」を用いた例

a. Osaka-**M**osaka b. Osaka-**P**osaka c. Osaka-**S**osaka

特にロシア語を用いた EW は、聞き取り調査で用例が得られただけでなく、自然会話のフィールドノートでも多数確認された。

名詞以外の品詞でも、名詞に比べると許容度に差があるが、様々な用例が得られた。例えば、先行研究では言及されていないタイプで、より生産性の高い副動詞の用例も見つかった (-I)p 副動詞形)。

(11) örük-**s**örük-tör-dü ter-ip-**s**er-ip

アンズ-**EW**-PL-ACC 集める-CVB-**EW**-CVB

「アンズとかを集めたりして」

以上のように、キルギス語の EW は様々な品詞や外国語でも形成可能で、生産性が非常に高いといえる。

なお、例(11)や以下の例(12)が示すとおり、先行要素と後続要素の両方に接尾辞が接続可能である。

(12) üy-**ü**-püy-**ü** bar beken?

家-POSS.3-**EW**-POSS.3 ある MOD

「(彼は)家とか持ってそう？」

ただし、先行要素の後の接尾辞については、コンサルタントによって許容度に差が見られた。最も意見が分かれたのは、複数接尾辞である。例(11)や以下の例(13)a.のように、後続要素の後の複数接尾辞は許容度が高く、自然会話のフィールドノートでも用例が見つかったが、先行要素の後は許容度が低い。

(13) alma(りんご)の EW

a. alma-**s**alma-lar

りんご-**EW**-PL

b. *alma-lar-**s**alma-lar (あるコンサルタントによると、口語では場合によっては可能かもしれない。)

りんご- PL- **EW**-PL

4.3 意味的特徴

他の PW と同様、EW は第一に総称的な意味を持つが、時に軽蔑や皮肉、愛称形・指小形のようなニュアンスが含まれ得ることが、先行研究で指摘されている。それでは、どのような場合に総称的な意味以外が

示されるのだろうか。EW 単独でもそういった意味が含まれるのだろうか。例えばキルギス語-ロシア語辞書の Yudaxin (1965)には、見出し語 *ir* (歌、詩)の用例として EW の *ir-mir* が掲載されている。ロシア語訳としては「詩」の指小形が示され、「軽蔑的」という注記がある。だが、以下の(14)、(15)のような例や、EW 単独で示されるのは、主に総称的な意味のみである。

(14) *Nami-Sami-ler kel-ip-tir.*

PSN-*EW*-PL 来る-CVB-EVID

「ナミたちとか来たようだ」

(15) *altin-paltin bar beken?*

金(ゴールド)-*EW* ある MOD

「金とかありそう？」

例(15)については、複数のコンサルタントによると、金(ゴールド)の EW 単独では特に質が悪いといったニュアンスは感じられず、むしろ「金だけではなく銀なども含めた高価なもの」というニュアンスもあるという。

だが、以下の例(16)の「うんざりさせられた」や、例(17)の「他の人には価値があると思われるかもしれないが、私にとっては必要ない」という文脈があって、初めて「～の奴」や「～なんか」という軽蔑的な意味が付加される。特に、通常は価値が高い・権威があるとされる物・人について言う場合において顕著である。

(16) *Iy, Ĵakřilik-Sakřilik-tar taĵat-ti.*

ああ PSN-*EW*-PL うんざりさせる-PST.3

「ああ、ジャクシルクの奴とかあいつらには、うんざりさせられたよ」

(17) *Altin-paltin maga kereg-i ĵok.*

金(ゴールド)-*EW* 私.DAT 必要-POSS.3 ない

「金なんか私に必要なない」

このように、総称的な意味以外が示されるのは、文脈が明らかな場合のみであり、その際には PW 全般に見られる表現力豊かなニュアンスが含まれるといえる。

なお、複数接尾辞-LAr が接続する場合との違いは以下のとおりである。

(18) a. *nan-dar*: 主に一種類のパンが複数ある場合

パン-PL

b. *nan-pan*: 様々な種類のパン(揚げパン、平らなパン等も含む)がある場合

パン-*EW*

c. *nan-pan-dar*: b.がさらに複数ある場合

パン-*EW*-PL

5. まとめと今後の課題

本発表では、主にキルギス語の口語で見られ、キルギス語文法においても周辺的な扱いとなっている EW を検討し、①音韻的特徴、②語形成上の特徴、③意味的特徴を明らかにした。今後の課題について、すでに本文中で述べたものも含まれるが、以下のとおり改めてまとめておく。

- ・後続要素が m-から始まる場合に制限があるのはなぜか(4.1 参照)。
- ・先行要素の後の接尾辞の接続について、特に複数接尾辞の許容度が低いのはなぜか(4.2 参照)。
- ・EW と総称的 PW の使い分けについて、さらなる意味論的考察が求められる。例(7)の A が示唆するように、EW のもとになる語が先行要素になるような総称的 PW が存在する場合、そちらの方が好まれやすいのか。その場合、EW が文脈によってネガティブな意味を持つことも関係しているのか(4.1 および 4.3 参照)。

略号

ABL 奪格, ACC 対格, CVB 副動詞, DAT 与格, EVID 伝聞, EW エコーワード, MOD モダリティ, PL 複数, POSS 所有接尾辞, PSN 人名, PST 過去, PW Paired words, 3 3 人称

参考文献

- Abduvaliev, I. (2008) *Kirgiz tilinin morfologiyasi*. Biškeek.
- Armoskaite, Solveiga & Kutlu, Ethan (2015) Turkish m-reduplication: a case of similitive number. *Turkic Languages* 18, 271–288.
- Biyaliev, K. A. (2003) *Kirgizskiy yazik*. Biškeek: Raritet Info.
- 飯沼英三 (1994)『キルギス語入門』, 東京:ベスト社
- Johanson, Lars (1998) The Structure of Turkic. In Lars Johanson and Éva Á. Csató (eds.) *The Turkic Languages*. 30–66. London: Routledge.
- Johanson, Lars (2002) *Structural Factors in Turkic Language Contacts*. London: Routledge.
- 亀井孝ほか編著 (1996)「反響語」『言語学大辞典』, 第 6 卷. 1084–5. 東京:三省堂.
- Yudaxin, Konstantin K. (1965) *Kirgizsko-russkiy slovar'*. Moskva: Soveckaya Enciklopediya.
- Karasaev, X. K. (2009) *Kirgiz tilinin orfografiyalik sözdüğü*. Biškeek: Mamlekettik til jana enciklopediya borboru.
- Oruzbaeva, B. O. (1987) Slovoobrazovanie. In Zaxarova, O. V. et al. (eds.) *Grammatika kirgizskogo literaturnogo yazika 1: Fonetika i morfologiya*. 95–105. Frunze: Ilim.
- Oruzbaeva, B. O. (1997) Kirgizskiy yazik. In Institut Yazykoznaninya RAN, *Yaziki mira: tyurkskie yaziki*. 286–298. Biškeek: Izdatel'skiy dom Kirgizstan.
- 庄垣内正弘 (1988)「キルギス語」亀井孝ほか編著『言語学大辞典』, 第 1 卷. 1416–1422. 東京:三省堂.

謝辞

本発表は、日本キルギス文化研究会第 4 回研究会(2023 年 1 月 30 日、Zoom によるオンライン開催)での発表に大幅な加筆・修正を加え発展させたものである。研究会でコメントをくださった方々、言語コンサルタントの方々に感謝申し上げます。また本研究は、JSPS 科研費 22KJ1442 の助成を受けたものである。